

COSMOS集



「あすなる集」特選

遠い約束

栗三誌 野*富山

この年も村の畑から届きたる土の匂いのする夏野菜
居酒屋で見えぬ未来を話してた友とビールと申カツ恋し
森のような読みかけの本に挿まれて葉を次々無くしてしまう
少しだけドラマティックな心地するペーターヴェンの「テスベスト」聴けば
今度いつ会えるだろうか友達と先が見えない遠い約束

ゆるされぬまま

新屋 希子 熊本

亡き人や生者にせかさるる思ひして墓に詣でる盆送りの朝
花立てにいっ挿されしか竜胆の造花二本が色褪せてをり
花立ての色失ひし造花朽ち落つることをゆるされぬまま
鶏頭の花房赤く立ち上がり送り火のごと墓石に映える
地震のあと崩れし墓石あまたあり 五年のあひだ時滞る

アプリの恋

工藤 亜希子*東京

まぼろしの禽獣たちの気配する夜のけやきの葉影の奥に

南の極ては北より寒いやさしすぎる人は時々ひやりと怖い
月曜に入院の報聞きておりわが知らぬ道さまよう父の
奥多摩に夏の光がきらめいてアプリの恋もまっとうな恋
ウイルスの世では不出来な新参者宿主殺む新型コロナ

笙

印出 美由紀 神奈川

たましひの出で入る小さき窓として能の面おもてに五つある孔
横長の函と袋と枕あり笙は寝かせて蔵ふものらし
横たはる笙を想へり中つ世の神泉の辺にいこふ小男鹿こしか
接種後の休暇をうまく使はむと励みたる夫やがて伏しをり
大き尻の蜂に自ままに蜜吸はれほとりと小花落とすサルビア

空の突端

前中 映 東京

六十年生きて選んだことがない退路を断つといふ選択肢
さし示すために伸ばした指先が何度も春のひかりに触れる
雛鳩のはねがいちまい落ちてゐる外階段は空の突端
ものみなが湿りを帯びる梅雨の午後リッツの箱もしんねりと開く
はつ夏のトマトをうすく切るたびに不器用だつたひとを想ふも

母の息

小谷 優香*鳥取

まだ恋を知らざる頃に戻りつつもう一度読む「ライ麦畑でつかまえて」
どこ行くも自転車好きの母なのに管に繋がれ寝たきりなんて
頑として家で看取ると決めし姉胃ろうの仕方習得したり
喘鳴とう音を聞きながらまだ温き母の手両手に包みて撫でる
母の息だんだん薄く遠のいて何度呼んでも何度呼んでも

走る風 吉田真弓 北海道

子を連れておむつとミルク延長のコード携へ娘は来たり
子を育て仕事をしたる母たちよ走る風かや流るる時は
花色の透けたる菫朝顔は明日咲く準備整へ待てり

雨の朝あまた朝顔咲きてをり今しかないのと言ひたるやうに
自転車は自転車置き場に行儀よく持ち主待てり秋の陽のなか

最高のギフト 松浦一郎 山口

最高のギフトお届けしましたと言つて来たたぶん迷惑メール
特選はまづ仏壇に供へたし母は必ず喜ぶはずだ

人間の些事にかまけて見ぬうちにはや青き穂を頂けり、稲
本じんかんの山LPやギターと平家にて朽ちてゆかむかわが人生は
よく晴れて風の強き日栈橋に船は大きくひとゆれしたり

あの夏の蟬 古木増美 岐阜

墨染の僧は袂に無を持つか縁者のことば皆受け入れて
心篤き人のことばは染み入りて感情のねぢ弛み初めたり

車椅子へ移乗する母重かりき耳底に残るあの夏の蟬
一煎目の茶の香のやうなことばさがし躡うづかる子の傍らにゆく
「おかえり」と自らに言ひ靴をぬぎ幼なはママの膝にダイブす

碧き世界 間城佐代 高知

鼠色の雲の中には如何ほどの水のタンクがあるのだらうか
傘マークの続く週間天気予報ひとつ入れたし晴れのマークを
夏の陽を撥ね返しつつ流れゆく仁淀川より吹く風涼し

川面へと映り込みたる空と山碧き世界に吾も入りたり
ナツアカネついて来いよと言ふごとく吾の隣を前後に飛び

白百合の登美子 内藤文子 福井

白百合の登美子の文字のやさしさよ若狭に遺る歌の短冊

白百合の登美子は知らず百伝ふ敦賀半島のプルトニウムを
瑠璃紺の茄子を漬ければみづみづと糠床の中に秋が立ちたり
父植ゑし枇杷で作りしジャムなれば琥珀にとけむ父のたましひ
日野川の瀬音に憩ふ精霊か夕昔の花となりて点れる

たった百年 村田淳子 埼玉

一回め二回め我は発熱し若いと言われるワクチン注射
昨日とおんなじような今日のきて平凡というは幸せなりき
今にして夢のような歌会よ、その日まで我は断酒して待つ
三人子はつれあい持ちて生きている 私はいつも遠くから見る
惑星のひとつにすぎぬ地球なり人は生きてもたった百年

熱惑星 水辺あお 静岡

どうしても笑へぬ一日の夕方は自分で自分をくすぐつてみる
物言はず外食しない口となり新聞読むときどき歪む
クーラーの部屋から窓の外見れば熱惑星のシエルターめきぬ
くらがりにスマホ開けば光もてあふれ出でくるあまたの言葉
いつどこで誰に話を聞いたのか庭の向日葵食ひにヒワ来る

メダカ 高山幸子 三重

まつ毛ほどに育ちしメダカすいと行くくきくくくる子子かわし

まず風に乗り一本を張りしクモ一心不乱にたて糸わたす
朝採りのピーマン胡瓜ゴーヤ食べみどりパワーで暑さ乗り切る
幼子の水のおそびは切りもなしとうとうシンク乗つとられたり
鎌もつも包丁にぎるも右手なれば左手が担うワクチン注射

恐竜の名 中居久子*岩手

さやさやと櫂の葉擦れの木の下で額に汗する父を偲びぬ
付け替えし風鈴の短冊軒下でくるくる回る風に吹かれて
潮騒の音を聴きつつ木洩れ日の参道上れば海が広がる
この海が「レイテ」に続いているのだと手を浸す友今日八月十五日
幾度も恐竜の名を問うわれに應える孫の語尾強くなる

班長なれば 大宅朋子 佐賀

人間は言葉を持てる獣かとセクハラ、パワハラ止まねば思ふ
集まれず意見は各戸訪れて聞くこととなる班長なれば
日本は先進国と思ひをり新型コロナひろがるまでは
電動の二輪車に乗り八十の人ゲートボールへ颯爽と行く
三日月がカミノリめきて光りをりうつつとして人悪むとき

空つぼの昼 永田恵美 福岡

七月のゲリラ豪雨の昼空を音無くノアの箱舟がゆく
夏空にトランペットの雲浮かび蟬の合唱に鳴るファンファーレ
祝日が名前を変へて日を変へてバス停でわたしを戸惑はせてる
ソーシャルでいつも誰かと戦へる若者たちが行き交ふ街角
終業式にお片付けした教室のひきだしのやうな空つぼの昼
今まさに一人うまれて一人去るそんな刹那に水瓜食みをり

夫とブランコ 岸下澄江*鳥取

冷え冷えのボカリスエットをそばに置き朝一番に草取りをする
トマトには人の勝手とうつるかも見つけた腋芽ためらわず摘む
はわい町にアロハシャツ着て職員は特産西瓜の売込み熱し
「バックします」かわい声響かせてど派手なダンブがわれに迫り来
日の暮れて児らの帰りし公園に夫と並びてブランコ揺らす

於美阿志神社 友田昌子*奈良

玉砂利の夏を掃きおりわが村の於美阿志神社の掃除当番
村びとと於美阿志神社の草刈れり入院中の夫に代わりて
「戦争に勝者はない」と記したるビルマで戦死の叔父さんの日記
絹のような三輪そうめんをぐいぐいと食べゆく家族三人の昼
草刈機のエンジン響く蚊遣器を腰に吊り下げ夫は草刈る

加茂水族館 原田登美 兵庫

山すその逢魔がときをオニヤンマ群れる蔵王の釜エメラルド
暗がりの水槽のまへ鉛筆をさがす児の絵に尾びれなき鯛
「ありがとう」と鉛筆受くる児と一会「加茂水族館」のインダイの緑
ミズクラゲゆらゆらめく水槽に子らさがしてる口の在り処を
傘をさすメリー・ポピンズのごと海中にアマクサクラゲ傘ひろげをり

きすげの原 川添良子*神奈川

こまやかに霧雨かかる静けさのきすげの原にいのち立たしむ
むしかえしむしかえしものを言う人よ食せよとろりんあん蜜あま酒
追いゆくは蜻蛉か姉かおととはアイスマミれの両手ひろげて

新らしき靴をはきしがアスファルトわがすり足をまたつまづかす
夫に手を取られ山頂に立ちにけりコロナ禍七月信州車山

絶品だつた

渡辺京子 宮崎

海鳴りは天氣が崩れる証だと祖母の教へし予報当たりぬ

供へ物の盆会の料理は芋の葉に包み小川に流しし昭和

きみどりの胡瓜の馬に揺られつつ祖母は来るらむ紹の着物着て

沖繩の次は宮崎に米軍が来ると脅えし十二の夏よ

輪島から干物届いた直ぐ焼いた鯛の開きは絶品だつた

取って置き

島 夏 樹* 宮城

生き飽きた果てに待つもの未知のものたつたひとつの取って置きたな



「その二集」特選

雨 音

工藤玲音* 岩手

いやなときいやだと言えて少女たち麦藁帽をいっせいに脱ぐ

使わない菓子箱いくつも重ねつつこれは空気の煉瓦と思う

カーテンに遮られても雨音は眠るわたしの鎖骨へ届く

ラム肉を焼きつつ父と母とする帰省できないおとうとの話

父と犬おなじ寝相でいる居間に差し込んでくる晩夏のひかり

太軸を杖に

谷川 恵 埼玉

〈出勤〉のはずが緊急入院す午前三時のくらき病棟

息を吸ふことのむつかし息吐くはなほさら難しかた白き病室

「ストレスによる悪化です」不安なき世界をだれか貸してください

震ふ指はフリクシヨンペンの太軸を杖に立ちをり さき、だいぢやうぶ

高次脳機能障害冠さるる父はも河野裕子を書写す

西 瓜

井上 啓子 愛知

肉すべて劣化してゆく果実たち甘味に騙され甘味に溺れて

これからのながくて暗い毎日の予告をします寒い秋雨

枯れ枝に似た老いの身はいつからか独りをえらぶ鳥の止まり木

思ふがままに終わりの白を描き尽くしあとかたもない春のどか雪

初生りの西瓜ピシリと鱗入りて「おつ旨そうだ」と夫は喜ぶ

「ああ山羊は西瓜の皮が好きだつた」山羊を飼ひぬし夫は語りぬ

物干しにジャック・ニクラウスのシャツは揺る今では夫の野良着となりて

心地よき木綿仕立ての夏パジャマ二着買ひ足すもう少し生きん

油蟬の鳴き止まぬ日は熱々の焼き茄子を食ぶ生姜卸して

ゆつくりと網戸を登る油蟬の凶鑑に載らぬ腹を見てをり

わたしと犬 清水 佑太郎*東京

日焼け止めしつかり塗ってくださいね日傘の影から生徒が覗く
納車の日カーディーラーからその足で葛西臨海公園へいく
波来れば砂浜の方へ走り出し大きな海から小さき犬逃ぐ
自動車の運転席はいつも妻わたしと犬は仲良く後ろ
免許証の出番は更新だから抽斗の中虚ろなゴールド

ポンポンダリア 小野 久美子*兵庫

風鈴も赤きカンナの花びらもだらりと垂れてじつとり暑し
夏の夜の遠くに花火の上がる音聞きつつながめるポンポンダリア
乳白の月下美人の花開き閉じてひと夜のスローモーション
炎天下アイスキャンディー食べ終えて手には木の棒一本残る
姫路には御座候の(御座候)赤あん白あんが御座候う
工事場のファン付ジャケット着た男ふくらすずめのようにふつくら

のほほん 丸山 克介 鹿児島

照ノ富士新横綱へ審議員「白鵬のやうにはなるな」と言へり
さりげなく立ち読みをしてコンビニの「新潮」読み切るマスクの顔で
夏空に描かれてゆく五輪マークたちまち風と雲にまぎれぬ
十年後、米寿なりなほのほほんと指折り数へ歌作りあむ
ガラス戸に張り付く親子の守宮をり夕日の色に腹を透かせて
週刊誌二冊読み終へ未だなほ吾が名呼はれぬ病院ロビー

被爆ピアノ 尾花 照子*福岡

清水の青田かすかに白くなりさみどりみどり風の渡り来

幼き日祖父海軍と知らぬままかもめの水平さん踊りたり
夏のはて呉工廠の夕影の戦艦大和を祖父は語りき

ありし日の子らの歌声抱きつつしずやかに鳴る被爆ピアノは
柔道のカルグニン選手の右胸にときおり見える(家族)のタトゥー

波 波 川越 三紀子*宮崎

ぬばたまの闇夜に雷鳴鳴り響き稲妻天にいく筋もたつ
鷹に似た稲田の上の巨大風ブレーキペダル踏みそうになる
湿原で数年ぶりに出会いたりまこと真黒き羽黒トンボよ
炎天下地を噛み砕くシヨベルカー跡形もなくスパー消えぬ
絶え間なくドドド寄せ来る波波波大海原の前に立ちおり

お下がりの浴衣 小森 鈴子 岐阜

魚となり翼竜となり移りゆくヒヨドリこせきの群れ畑にあふく
黄石瓜こうせきのほのかな甘みなつかしき兄三人と食みしこの味
初めての短歌の選なり良き歌に丸をつけゆく味はひながら
お下がりの浴衣の似合ふ婚約者息子と来たる花火の夕べ
芝が伸び庭の白石かくしたり肩の骨折り働けぬ間に

畳の匂い 奥村 幹男*愛知

風にそよぐ植田の海に浮かぶこと赤きトラクターに人影ひとつ
遠くより気配を察し雄キジはそろりと茂みに身を潜めたり
美しき鼻濁音ありアーカイブ画面の懐メロ「津軽海峡」
ソファアでもカーペットでもなく夏の日の匂いは昼寝の畳の匂い
おかしいな車庫入れなんぞお手のものだった私が右にずれてる

ゆふすげの花 池田 あつ子 愛知

咲くちから溜めゆくならむゆふすげの赤子のおゆびのごとき香は
花開くゆふすげ見むと逸りつつ落日の野を再び訪へり

日の落ちて草の堤にひんやりとゆふすげの花一夜をひらく
ひとすぢの川の堤に点々とゆふすげ灯る彼岸のごとく

身の裡にゆふすげの花ひらくとき幽かな瀬音いづこより生る

あの時も雨 野口 喜美江*群馬

桜桃忌今日もあめなり一度だけ三鷹に参りしあの時も雨

夕暮れて庭のアナベル白々とほのかに浮かび コロナ禍止まず

子の舅エプロン似合う主夫となり自慢の味のキャラバキ持ち来

米茄子のはつなりの紺もぎて来てしぎ焼きにするわが家の定番

仏前にメロン供えんか迷ううち横より手の出て買われてしまう

人差指の穴 松本 道代 熊本

広がる大葉のかげに絡みたるトンボまぶしも蓮池しづか

遠き代の花にうつるふ日の光古代の蓮は令和のたをやめ



アアカカネみな一様に透明の翅ひからせて頭上に群れる
繁りたる棟の木陰の昼深しラブラドルが目を閉ちてゐて
草を引く軍手三組いづれにも人差指に穴あきてをり

百まで 富永 弘 東京

百までは生きてみたいと言ひし母よく眠るなり百二となりて
霜白き朝を母と麦踏み揃ひの防空頭巾かぶりて

三人に銃一丁の兵隊が小学校にあまた詰めぬき

国敗れ兵隊去りて農道に戦車二台が捨て置かれぬき

勉強をせよとは言はぬ母なりき農業を継ぐ他なきわれに

紺碧の海 沢田 弘子 奈良

立て掛けた物干竿に向う脛あつと言ふ間に打ちつけてしまふ
毎日が三十度越すこの猛暑乙女のペディキュア紺碧の海

一時間千円也の猫ハウス 猫と一緒に遊びませんか

窓際に眠る三毛猫近づけばうす目を開けて再び眠る

オンラインピック終はるやコロナの患者増えラジオは一日大雨のニュース

散らぬ定め 福川 和枝 長崎

本を繰りテレビ眺むる日過ごしに忘れ物いくつ為せる心地す
朝々に白き木槿の咲き継ぎて冷風満ちて秋の気配す

二回目もワクチン接種異常なし子等にラインす一夜過ごして

枯れ極み散らぬ定めの紫陽花は盛る形を雨にうたるる

中腹に靄棚引かせ遠山は宵に入りゆく夏の終りを